

インダストリアル・デザイン界の奇才 川崎和男は、 この展覧会が見たい！



「若い頃は医者と作家の二足のわらじを履こうと思っていた」と語るのは、世界的なインダストリアル・デザイナーであり、また医学博士号の学位を持つ川崎和男さん。

「もともと僕は医学部志望でした。しかし、美大に進んだのは、当時人気のあった横尾忠則さんの存在がありましたね。横尾さんは、人気絶頂期にあった浅丘ルリ子さんのヌードをポスター化してしまうなど、話題性もありましたし、1枚の紙にきれいな線を引ければ金になるのかとデザイナーを目指したのです。

グラフィックの世界の人は、横尾さんにしてもサイトウマコトさんにしても、アートの戻っていく傾向がありますね。そのふたりともが金沢21世紀美術館で個展をしている。金沢の展覧会はクオリティが非常に高く、見応えがあると思っています。逆に言えば、金沢で展覧会ができるようにならないとダメですよ（笑）。僕自身は金沢で2006年に個展をしていますから、ふたりよりも早かった（笑）。

とにかく、僕がやってきたインダストリアル・デザインの仕事をアートとして認めてくれた美術館には感謝しています。従来の枠組みに囚われることなく、作品自体を評価している金沢21世紀美術館の姿勢にはとても敬意を覚えます」

さて、デザイン界の風雲児とも称される川崎和男さんだが、その仕事は実に幅広い。感性で語られることが多かったデザインの世界に、黄金比や幾何学定理など、数々の数学理

論を持ち込み、機能美と美しい形態を追求。タワシ、メガネ、家電などの日用品から、ロボット、コンピュータ、原子力発電装置など多岐にわたる。

圧巻なのは、28歳の時に交通事故にあい、車椅子生活を余儀なくされた後のこと。シヨウウィンドーに映る車椅子姿の自分を見て、「お仕着せの車椅子は格好悪い、ならば自分の思い通りの車椅子を造ろう、これが造れないようならインダストリアル・デザイナーとして失格だ」と、8年という長い年月と試行錯誤の果てに、理想の車椅子を創り上げた。

今、その車椅子は、川崎さんの他の作品とともに、ニューヨークの近代美術館に収蔵されている。

また、この事故と手術をきっかけに、自分の体内に埋めこまれたボルトナットのデザインが気にくわず、その改良にも臨んだ。しかし、体内の臓器デザインや器具デザインは医学の知識がなければ挑めないとして、ついに独力で医学博士号を取得。その追求は、45歳で起こった心臓発作をきっかけに、今では人工心臓の研究にとりくんでいる。その飽くことなき、デザイン美の追求は、クライアントとの喧嘩の原因となることもしばしば。人呼んで、「喧嘩師デザイナー」。

その川崎さんが思いを寄せる絵師がいる。来年展覧会が予定されている長谷川等伯だ。

「等伯の絵は、はじめて見たときから惹かれています。とくに墨と金との使い方は、当時誰もやって

いなかった新しい方法論だったのではないでしょうか。

作品に興味を持ち、その生き方を調べてみたら、ますます魅力を感じるところがありました。まず自分と同じく北陸の人であること。当時主流であった狩野派に対して強烈なライバル意識を持ち、独自の画風を確立したこと。おそらく権力闘争の果てに、跡継ぎと見込んでいた長男・久蔵を暗殺されたこと。晩年には事故で利き腕の自由を失うなど、激しい境遇を生き抜いた等伯。これほどでもない画家だと」

「デザイナーはわがままであると同時に、我を通す喧嘩師であれ」と常々、川崎さんは語るが、等伯の闘いに満ちた生き様と、そこから生まれた優れた作品群に共感を覚えているのだろう。

展覧会は2010年2月から、東京と京都の国立博物館を巡回する。



川崎和男さんの美意識が詰まった人工心臓

■ 1949年福井市生まれ。インダストリアルデザイン、プロダクトデザインを中心に、デザインディレクターとして伝統工芸品からメガネ、インテリア用品、機械実装設計やコンピュータ開発まで幅広くデザイン活動を行う。国内・海外デザイン賞を多数受賞。ニューヨーク近代美術館をはじめ、海外の主要美術館に永久収蔵・永久展示多数。

医学博士、大阪大学大学院教授、名古屋立大学大学院名誉教授、多摩美術大学客員教授、日本産業デザイン振興会グッドデザイン賞審議委員会委員。

ちょっと先ですが、



没後400年 特別展「長谷川等伯」

2010年2月23日(火)～3月22日(月)

東京国立博物館

巡回

京都国立博物館 (4月10日～5月9日)



未完の横尾忠則一君のものは
僕のもの、僕のもの僕のもの

開催中～11月3日(火)

金沢21世紀美術館

